



小井土 文哉

Profile

1995年釜石市出身。釜石小、釜石中、盛岡第一高校を経て、桐朋学園大学音楽学部を首席で卒業。桐朋学園ソリストディプロマコースを経て、イタリア・イモラ音楽院を修了。現在同音楽院ポスト・ディプロマコースに在学中。深川美奈、須田真美子、ボリス・ペトルシャンスキイの各氏に師事。第87回日本音楽コンクール、第15回ヘイステイングス国際ピアノ協奏曲コンクール（イギリス）をはじめ、国内外の多数のコンクールで優勝を果たす。2022年5月には英ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団のソリストとして英国ツアーオーを行い好評を博した。



その後、高校2年時には部活をやめ、ピアノのレッスンに本格的に取り組んだ。一方、プロの演奏家になる人の多くは、小学生の頃からプロを目指して練習を重ね、高校も音楽を専門的に学べる学校に入る人が多い。そのため、この時点ではプロの演奏家を目指すことは一般的にかなり遅い部類と言えた。不安は無かつたので、結果が発表された時は驚いた。「不安とかは全然なかった。自分の性格もあると思うが、何とかなるでしょ」という気持ちで目の前の練習に集中してやってきた」とはにかむ。笑顔で答えたその言葉の裏には相当の努力があったことは想像に難くない。その努力は結果として現れた、高校3年時には第67回全日本学生音楽コンクール東京大会で音楽学校の学生らを抑えて優勝した。「まさか優勝するとは考えてもいなかつたので、結果が発表された時は驚いた。この時の演奏がきっかけとなり進学する大学を決めた。その当時はあまり自覚は無かったが、今思えば人生の中でも大きな転機だったと思う」

大学は、日本を代表する音楽学校である桐朋学園大学に入学した。そ

世界にまで活躍の舞台を広げる小井土さんにとって釜石とは、「たとえまちの景色が変わっても、昔と変わらない同じ空気を感じることができたたった一つの故郷。この感覚は釜石でしか感じられない」と故郷への想いを語った。

故郷を離れても、いつでも心は釜石に寄り添っている小井土さん。自分にしか表現できない音を求めて、これからも挑戦を続けていく。

震災後に高鳴った自分の心 自分にしか表現できない音を求めて

～ピアニスト 小井土 文哉 の原点～



「岩手で弾くのは特別。お客さんが温かく迎えてくれたのでホームのような気持ちで演奏できた」と3月2日に釜石市民ホールTETTOで行われたコンサートを振り返るのは釜石出身でピアニストの小井土文哉さん。現在は、日本各地をはじめ、世界を舞台に活躍しています。今回は、そんな小井土さんの現在に至るまでの軌跡と小井土さんが感じる釜石を紹介します。

小井土さんがピアノを始めたのは3歳の頃。市内の山崎眞行先生に師事しピアノを学び始めた。釜石小5年時には東北ショパン学生ピアノコンクールで金賞を受賞するなど、年齢を重ねるごとにピアノの腕はメキと上達した。

その後、釜石中に進学。ここでも順風満帆な学生生活を送っていたが、卒業を間近に控えた3月、悲劇は起つた。当時を振り返り「発災直後は自分の理解では追いつかないほど事態に何が起きているのか分からなかつた。翌日、水がひき変わり果てたまちの姿を見て、ようやく現実として気持ちを整理しようと思いつ始めた」と語る。

周囲も落ち着かない状況の中、4月の半ばに進学のため、盛岡へと引っ越し。「盛岡は何事もなかつたかのように日常が流れてい、釜石と同様のギャップをすごく感じた」と振り返る。部活はバスケットボール部に入部した。「入学当初はピアニストになりたいとは全く思っておらず、そのきっかけも特になかつた。ピアノの練習時間はなかなか取れず、週に2~3日弾くかどうかという感じだった」と当時を振り返る。

そんな小井土さんの心境に変化があつたのは震災から半年ほどたつたあつたのは震災から半年ほどたつた。その後、高校2年時には部活をやめ、ピアノのレッスンに本格的に取り組んだ。一方、プロの演奏家になる人の多くは、小学生の頃からプロを目指して練習を重ね、高校も音楽を専門的に学べる学校に入る人が多い。そのため、この時点ではプロの演奏家を目指すことは一般的にかなり遅い部類と言えた。不安は無かつたのかと尋ねると意外な答えが返ってきた。「不安とかは全然なかった。自分の性格もあると思うが、何とかなるでしょ」という気持ちで目の前の練習に集中してやつてきた」とはにかむ。笑顔で答えたその言葉の裏には相当の努力があったことは想像に難くない。その努力は結果として現れた、高校3年時には第67回全日本学生音楽コンクール東京大会で音楽学校の学生らを抑えて優勝した。「まさか優勝するとは考えてもいなかつたので、結果が発表された時は驚いた。この時の演奏がきっかけとなり進学する大学を決めた。その当時はあまり自覚は無かったが、今思えば人生の中でも大きな転機だったと思う」



小学1年生頃の小井土さん

高校1年の11月。この頃から、多くの演奏家が復興支援としてコンサートを開催することが多くなり、そのうちの1つとして県民会館で行われた演奏会に足を運んだ。「小さい頃から慣れ親しんできた音楽から、初めて距離が生まれた環境で聞いてみると、すごく新鮮に感じて、スッと心に入ってくるような、それまでにあった」と振り返る。それと同時に音楽の素晴らしさにも改めて気づいたという。「1人の演奏家による演奏でも、それを聞く人によってさまざまな解釈や感じ方があって、それがそれに異なったアプローチができる。これは音楽にしかできないことなんじゃないかなとその時に思つ

の後も第87回日本音楽コンクールや第15回ヘイステイングス国際ピアノ協奏曲コンクールなど、さまざまにコンクールで優勝を重ね、現在も国内外各地で活動を展開している。

そんな小井土さんがプロとして最も意識することは何なのか。「音楽の世界はどこからがプロという明確な線引きがない。演奏会に来てくれた人が、この人の音楽はいいなと思えば、そこに価値が生まれると思う。自分が演奏する曲は、これまでに世界中の演奏家が何千回、何万回と演奏してきた曲。人のまねをするのであればAIでいい。しかし、お金を払って自分の演奏を聞きに来てもらっている以上、自分にしか感じられない音を表現し、お客様にはその場でしか感じられない時間を楽しんでもらうことを大事にしている」と振り返った。

世界にまで活躍の舞台を広げる小井土さんにとって釜石とは、「たとえまちの景色が変わっても、昔と変わらない同じ空気を感じることができたたった一つの故郷。この感覚は釜石でしか感じられない」と故郷への想いを語った。

故郷を離れても、いつでも心は釜石に寄り添っている小井土さん。自分にしか表現できない音を求めて、これからも挑戦を続けていく。